

報告

平成 28 年 社会活動委員会主催 講演会

北海道のこれから

～少子高齢化・過疎化・温暖化 三つの荒波を超えて～

永瀬 次郎

1. はじめに

2016 年(平成 28 年)11 月 21 日(金)にホテル札幌ガーデンパレスにて開催された、社会活動委員会主催の講演会について報告いたします。

講師に、作家・ジャーナリストの外岡秀俊氏をお迎えし「北海道のこれから 少子高齢化・過疎化・温暖化 三つの荒波を超えて」という大きなテーマでご講演いただきました。かわきりの能登本部長のご挨拶は以下のようなものでした。「今回の講師のプロフィールを見て驚いた。札幌南高卒で東大卒、朝日新聞入社、ニューヨーク特派員、編集局長という遍歴を見て、これはとんでもない人に講師に来ていただいたと感じました。そんなすごい人がこれからの北海道をどのように語るのか、たいへん楽しみです。」

北海道がこれから直面する難題に対し、どのように乗り越えてゆけば良いのか、大いに期待し拝聴させていただきました。

2. 外岡秀俊氏プロフィール

1953 年 札幌市出身。高校まで札幌在住
 1977 年 東京大学卒業後、朝日新聞社入社
 1989～93 年 同社ニューヨーク特派員
 2003～06 年 同社ロンドン欧州総局長
 2006～07 年 同社ゼネラルエディター
 兼 東京編集局長
 2011 年 3 月 早期退社しフリー活動開始

東大在学中に石川啄木をテーマとした小説「北帰行」により文藝賞を受賞。「震災と原発 国家の過ち」「3.11 複合被災」などの新書を多数執筆されているほか、中原清一郎名義での小説「未だ王化に染



写真-1 外岡秀俊氏ご講演の様子

はず)「ドラゴン・オプション」「カノン」など多数出版されています。

3. 講演主旨

(1) 北海道は開道 150 年、三度目の節目

来年 2018 年は、蝦夷地が北海道に変わった 1868 年から 150 年の節目にあたる。開道 50 年(1918 年)の一度目の節目には北海道博覧会が開催され、馬車鉄が市電に変わった。開道 100 年目(1968 年)の二度目の節目には、野幌森林公園に 100 年記念塔と北海道開拓記念館が建設された。来年で開道 150 年。この間に北海道の何が変わったのだろうか。

一方、第二次世界大戦の敗戦を節目と考え、戦前 77 年を「近代日本」とし、戦後 70 年を「現代日本」とする見方もある。近代はさらに「富国強兵」「追いつき追い越せ」を基軸とした近代前期と、「一億一心」「神国日本」を基軸とした近代後期に分かれる。現代も同様に「経済大国」「科学立国」を基軸とした現代前期と、「平和国家」「成熟国家」を基軸とした現代

後期に分かれる。この「近代」と「現代」の節目である1964年(昭和39年)には、日本がOECDに加盟、太平洋横断ケーブルの敷設、東京五輪の開催、佐藤栄作政権の誕生などがあり、昭和後期を象徴する年となっている。

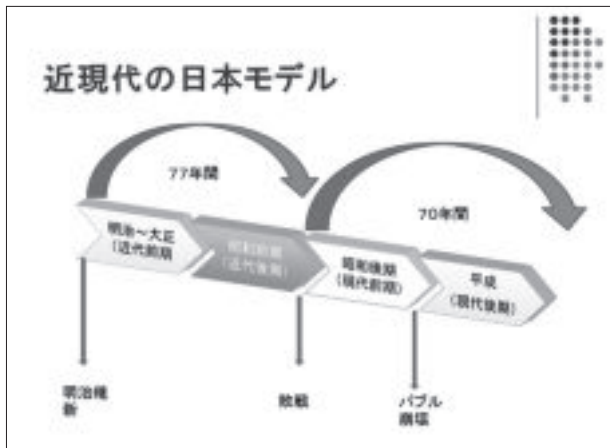


図-1 近現代の日本モデル

またこの間、日本の人口の分布も大きく様変わりしている。1920年において、最も人口が多い都市は東京市(約217万人)、2番は大阪市(約128万人)、3番は神戸市(約60万人)、以降京都市、名古屋市、横浜市と続き、9番目に北海道で最も人口の多い都市として函館市(14万人)がランクされている。

当時、北海道で最も人口の多い都市は函館市だった。それが、1965年には、9番目の都市として札幌市(約80万人)にとって代わる。札幌の人口はその後増え続け、2005年には約190万人となり、日本で5番目の都市となった。しかし、北海道全体の人口は増えているわけではない。図-2に示すように、北海道では札幌だけが例外的に増え続けている状況であり、その他の都市は逆にほとんど減少に転じている。道民人口は1995年の569万人をピークとして、その後減り続けている。この傾向は全国的なものであるが、北海道においては、ピーク人口の10%減、20%減のタイミングを10年ほど早めに迎えることが予想されている。人口減少の大きな原因としては、林業不振と炭鉱の閉山が有る。

一方、札幌の人口増加は、北海道の人口に占める割合を三分の一以上に高めるに至っている。札幌の人口増加には以下の特徴が有る。

- ① 進学・就職期の15歳～24歳は転入超過
- ② 20代は道外への転出超過
- ③ 60歳以上は、道外から道内へ、道内から札幌への転入超過

札幌への人口流入は多いが、その多くは高齢者が占めている。札幌にはサービス業が多く、モノづくり産業の集積が少ないので、若い女性は多いが男性は道外に転出する傾向が有る。自然増が減少するので、今後急速な少子高齢化が進むと思われる。

(2) 三つの荒波

今後の北海道に対し、荒波となって押し寄せるものは、一つ目は「少子高齢化」、二つ目は「過疎化」、そして三つめは「地球温暖化」である。

2016年の国勢調査速報によると、道内人口は約538万人である。5年前から2.2%の減少である。ピーク時に比べると約30万人の減少であり、これは旭川市が消滅したことに等しい。しかし札幌市の人口は依然として増え続けており、一段と一極集中が進んでいる。

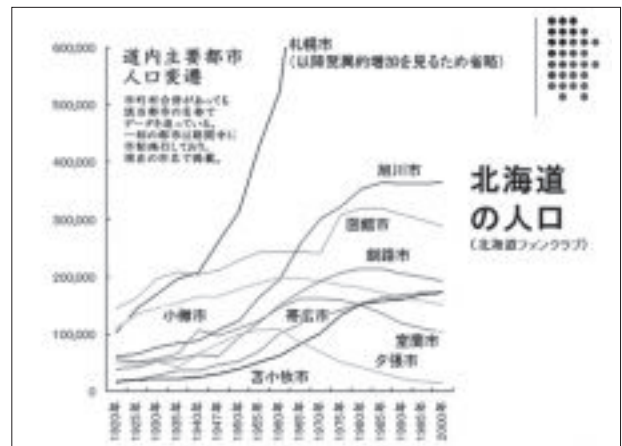


図-2 北海道の人口(図中の文字を拡大編集)

日本創生会議が発表した「消滅可能性都市」という概念が有る。人口の再生産力(20～39歳の女性人口)が2040年までに50%以上減る自治体のことである。全国で全自治体の50%に当たる896自治体にその可能性があることが想定されている。このままでは大都市だけが残る「極点社会」になりかねない。

経済成長は次の式で表すことができる。

$$\text{成長(生産)} = (\text{一人一人の生産性}) \times (\text{労働力人口})$$

我が国の労働生産性はG7の中で最下位である。労働力人口は2013年時点で約8,000万人であるが、2060年には約4,000万人に半減することが予想されている。経済成長も鈍化していくことが予想される。

現在から2040年は、老年人口(65歳以上)が増加し、生産人口(15歳～64歳)と年少人口(14歳以下)が共に減少してる状況である。これが2040年からは老年人口の減少が始まり、2060年からはその傾向がさらに強まり、年少人口の減少も始まる。

地方から大都市への人口移動により、都市部の人口は一時は過密するが、いずれは都市部も衰退へ向かう。図-3に示すように、北海道におけるその傾向はさらに強い。



図-3 札幌の高齢化

少子化・高齢化の進展及びそれに伴う経済成長の鈍化等により、社会保障制度の存続が困難となる。結果、格差がさらに拡大し、「成長し続け、安全で安心して暮らせる社会」「一人一人の豊かな人生」のいずれも実現しないおそれがある。

高齢化は、日本人の平均寿命が延びていることが大きな理由だが、全員が健康寿命を維持できるわけではない。認知症になる人が増えている。65歳以上の高齢者の認知症罹患率は、2025年には20%を超えるとの予想もある。昔は社会に出て、結婚後、子育てに重なる時期に親が亡くなった。今は晩婚、高齢出産、親の介護、老老介護、認認介護の状況に変わってきている。

世界の経済に目を転じると、中国、インドの台頭

が目覚ましく、米国は、早くも2016年にも中国に追い越され、いずれはインドにも追い越される。中国とインドを合わせれば、まもなくG7全体の経済力をも追い越し、2060年にはOECD加盟国全体を追い越すと予想されている。急速な高齢化が進むユーロ圏や日本といった経済大国は、若年層が人口の大部分を占める新興経済のインドネシアやブラジルのGDPに圧倒される。

三つ目の荒波の「地球温暖化」への対策は、全世界で取り組まなければならない喫緊の課題であるが、これは北海道にとってマイナス面ばかりでもない。気温の上昇を農業に生かす取り組みが有望である。

(3) 北海道のこれから

北海道は、三つの荒波にどう立ち向かうのか。長所(資源)と短所(欠落、ボトルネック)を正確につかむことが必要だと考える。北海道は広大な土地を有している。ネットで話題になったクイズがある。

クイズ：北海道の面積の中に、何県が入るか？

答は図-4に示す通り、16県である。



図-4 クイズの回答

北海道の面積は日本の全面積の22%を占める。世界で見ると、国では面積でオーストラリア、人口ではデンマーク(554万人)やフィンランド(533万人)に匹敵する。面積・人口ともに同規模なのは英国のスコットランド(525万人)である。この広さを生かさぬ手はない。「過疎」は広さという資源の裏返しである。嘆くだけでなく、その活用を考えたい。

具体的には下記を考える。

- ① 北海道版の「少子化対策」を実施すべき。
国任せにせず、若い世代に魅力のある労働環境を整備する。北海道の自然、安い不動産価格を活かして、子育て支援を活発に実施する。
- ② 中核都市を守る。
ドイツなどの成功例を参考に、札幌と旭川や函館、釧路、帯広とのバランスを考える。それぞれの都市の特徴を生かし、存続の道を探る。
- ③ 観光のインバウンドをリピーター化し、長期滞在型に誘う。現在はインバウンドが好調だが、将来もそれが続くとは限らない。長期滞在型への変容にて安定化を目指す。
- ④ 地球温暖化を見据える。
地球温暖化のマイナスを、チャンスに転ずる。国際的には北極海航路の検討を行う。温暖化により、冬期間の最低気温が上昇し、冬日が大幅に減少し、桜の開花も早まる。今まで無理だった植物の生育が可能になる。広大な北海道が、ブランド果物の産地となるかもしれない。
- ⑤ 移住・定住の促進、交流人口を増やす。
「ふるさと納税」などをきっかけに、応援人口、交流人口を増やし、やがて移住・定住に結び付ける。「何もない」が武器。スロータウンの魅力づくり。上士幌町のように8年間で103人の移住を実現させた成功例もある。



図-5 上士幌町の「ふるさと納税」の活用

東京オリンピックは過去二度の歴史が有る。

- 1940年 東京五輪夏季大会を返上
戦時下の「孤立」を象徴

1964年 東京五輪開催

「経済成長」「国際社会への復帰」を象徴
2020年に再び東京五輪が開催される。ここで象徴すべき価値観は何なのか、前述した節目としても考える必要があると考える。

同様に札幌冬季五輪も過去二度の歴史が有る。

1940年 札幌五輪冬季大会を返上

戦時下の「孤立」を象徴

1972年 札幌五輪冬季大会開催

「札幌」が飛躍するバネになる

2026年に札幌で、再び五輪冬季大会が開催されれば、「成熟社会」「バランスある社会」を象徴をすることができるかもしれない。

三つの荒波にどう向き合うのか。少子高齢化と過疎化は、すでに社会に大きな影響が出始めている大問題であり、地球温暖化は、地球全体の環境に大きな影響を与える大問題である。しかし、悲観する必要はない。問題の長所と短所を見据え、危機(ピンチ)を機会(チャンス)に変える取り組みをすべきである。「窮すれば通ず」は、「窮すれば変ず、変ずれば通ず」である。

4. おわりに

非常に大きなテーマに対し、統計数値を示しながら非常に分かりやすくご説明いただきました。また将来へ向けての明確なお考えが、たいへん勉強になりました。ありがとうございました。

外岡講師の著書のひとつに『「伝わる文章」が書ける作文の技術 名文記者が教える65のコツ』があり、文章作成のノウハウが詰め込まれているとの情報を得ました。筆者も、講演者に敬意を表して、まず書店にて同書を買って求め、熟読して報告書の作成に臨みました。伝わる文書になっていれば、幸いです。

永瀬次郎 (ながせ じろう)

技術士(衛生工学)総合技術監理部門

日本技術士会北海道本部
社会活動委員会委員
池田煖房工業株式会社

